

おてら

常例十六日講
毎月十六日午後一時より
お経練習・法話会

写経会

毎月第二・四金曜日
午後一時より

先祖への供養は

私への供養

三月十八日〜二十四日

三月二十一日(火・祝)

午前十一時より

彼岸中日法要

護持会総会

おときは中止致します

ご本尊様にお参りしてから

お墓参りをしましょう

うらやましい死に方 位職 蒲原 霊英

『文藝春秋』の創刊百周年新年特大号に、作家の五木寛之さんが選んだ「うらやましい死に方」という読者投稿十四編が掲載されており、その中に檀家の方の投稿が載っています。筆者が小学六年生の時に事故で亡くされたお父様のことが書かれており、信心深いお母様が常に言われていた「寿命」が尽きたのだと理解して、心の整理をされたとのこと。そして、高齢になられたご自身も、「寿命が尽きるまで楽しく生きるのが『うらやましい死に方』だ」と、お父様の死を通してのご自身の死生観を記されています。

親鸞聖人は、「なごりをしくおもへども、娑婆の縁尽きて、ちからなくしてをはるときに、かの土へはまゐるべきなり」(『歎異抄』)と述べられました。どれだけ名残惜しくても、娑婆の縁に寿命が尽きる時がやって来て、今度は、かの土へお浄土へ仏と成って生まれ行くご縁をいただくのです。名残惜しい気持ちには、お浄土へ行く方も遺された方も同じで、いつまでも大切な人や愛しい人と一緒に居たいものです。しかし、私達は「死の有る生」を生きています。この真実に目を背けて生きるわけにはいきませんが、私達は常日頃はそんなことは考えたくもないので、考えないようにして生きています。でも、いつ訪れるか分からない死を意識して生きておればこそ、今のこの一時一時を大切に、懸命に、悔いなく生きることができるとは、ないでしょう。そうやって生き切ることができ、「ありがたかった」と感謝の中に死ぬことができれば、「うらやましい死に方」と言えるでしょう。そして、遺れられた者達もまた、その方の死を仏縁として、改めて死を自分事として捉え、その方の遺された生き様・死に様をみ教えとして、自らの生き方を絶えず問うてゆくことが肝要です。不思議なもので、亡くなられてから時間が経つにつれて、「こんな事をしていて、あんな事を言っていた」とその方のことを思い出しては、生きていた時にはさほど分からなかった、その方の価値観や人生観等をじっくりと味わわせていたかどうか、ことが多い気がします。娑婆の縁が尽きて、遺された私との縁が切れるわけではなく、ありがたいことに、仏様と成って常に私と共に人生を歩んでくださっているのです。これが念仏者の死生観と言えましょう。 合掌

御正忌報恩講法要

新しい「領解文」(浄土真宗のみ教え)

宗祖親鸞聖人のご命日に際し、聖人のご遺徳を偲び、そのご苦勞を通じて阿彌陀如来のお救いをあらためて深く味わわせていただく御正忌報恩講法要が、本山・御影堂で一月九日から十六日まで営まれました。ご満座に続き、大谷光淳門主がご消息を發布され、新しい「領解文」(浄土真宗のみ教え)を示されました。そして、「僧俗を問わず多くの方々に、さまざまな機会に拝読、唱和いただき、み教えの肝要が広く、また次の世代に確実に伝わることを切に願っております」と述べられました。

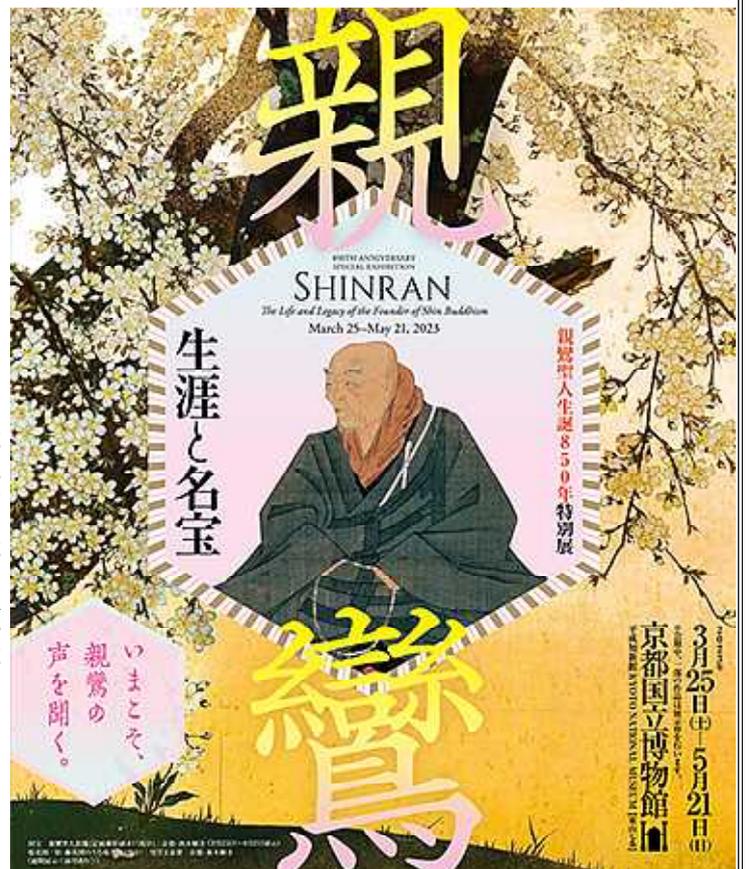
南無阿彌陀仏

「われにまかせよ そのまま救う」の 弥陀のよび声
私の煩惱と仏のさとりは 本来一つゆえ
「そのまま救う」が 弥陀のよび声
ありがとう といただいて

この愚身をまかす このままで
救い取られる 自然の浄土
仏恩報謝の お念仏

これもひとえに
宗祖親鸞聖人と
法灯を伝承された 歴代宗主の
尊いお導きによるものです

み教えを依りどころに生きる者 となり
少しずつ 執われの心を 離れます
生かされていることに 感謝して
むさぼり いかりに 流されず
穏やかな顔と 優しい言葉
喜びも 悲しみも 分かち合い
日々に 精一杯 つとめます



今年、浄土真宗を開いた親鸞聖人の生誕八五〇年にあたり、聖人は京都に生まれ、九歳で出家して比叡山で修行に励みますが、二十九歳で山を下り、法然上人の弟子となります。そこですべての人が平等に救われるという阿彌陀仏の本願念仏の教えに出遇うも、法然教団は弾圧を受け、聖人も罪人として還俗させられ、後に流罪となります。その折、当寺にもご滞在されました。その後、罪が赦された聖人は、関東へ赴き長く布教に励み、やがて京都へと戻り、晩年まで主著『顕浄土真実教行証文類』(教行信証)や『和讃』など多くの著作の執筆を重ねました。その九十年の生涯と教えは、今も多くの人を魅了して止みません。

本展覧会は親鸞聖人の求道と伝道の生涯を、自筆の名号・著作・手紙をはじめ、彫像・影像・絵巻など浄土真宗各派の寺院が所蔵する法宝物を一堂に集め紹介します。